

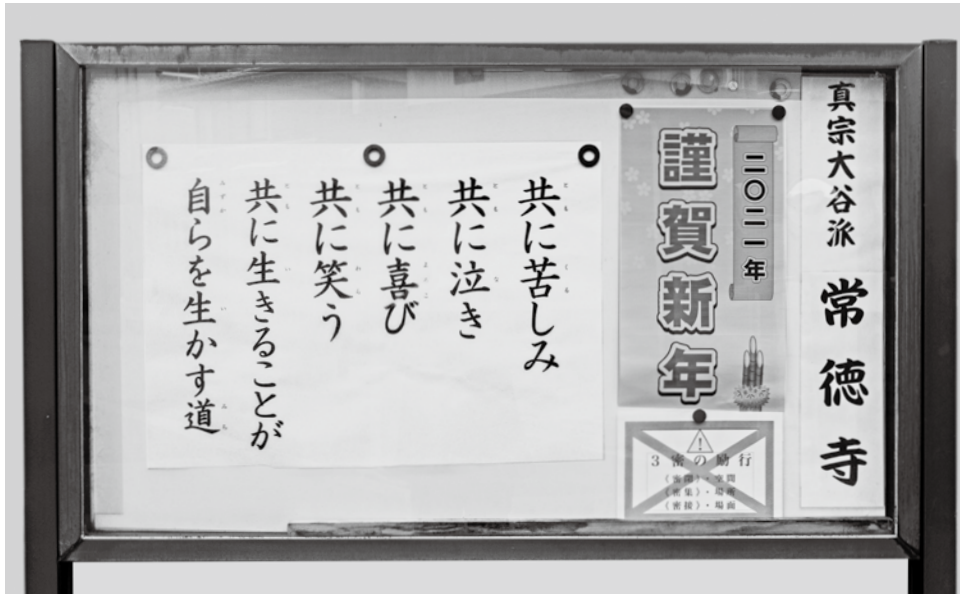
富山 如大地

— 第148号 —

発行人
長澤 秀豊

発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
真宗大谷派富山教務所
編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799
教区・別院ホームページ [富山東別院](#)
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



もくじ	
・富山別院秋季彼岸会法話 梨谷真嗣氏	2~10
・研修会報告	11
・寺院紹介	12~13
・座談会報告	14~17
・教区だより	18~20

常徳寺様 揭示法語

(魚津市)

✿✿✿ 揭示法語を書きながら ✿✿✿

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、法要も開法会も開催が困難な状況の中で「それでも寺として何か出来ることを」と思い、揭示伝道を書き始めた。

『真宗聖典』から引用することもあれば、心に残った芸能人の言葉やヒット曲の歌詞を書くこともある。

しかし「この言葉がいいな」と思っても、書いてから「前後の文脈を知らずに読むと誤解するのではないか」と悩んで、結局ボツにすることもあった。そのたびに、伝えたいことを簡潔な言葉で伝えるのは難しいと感じる。

寺の揭示板に限らず、私たちの日常的な言葉のやり取りでも同じことが言えるのではないだろうか。マスコミやSNSでの発言が、本人の意図を無視して取り上げられて「炎上」することがある。表情や声色のわからないメールでのやり取りから、すれ違いが生まれいじめや殺人事件に発展することもある。もちろん、面と向かって会話していても誤解やすれ違いは生じる。

人は言葉がないと思いを伝えられないが、言葉だけで思いを正確に伝えることも難しい。言葉を発する側も受け取る側も「言葉の不便さ、不完全さ」を意識することが大事ではないか。そんなことを考えながら、次に書く法語を選んだ。

一句一言を聴聞するとも、ただ得手に法を聞くなり
ただよくきき、心中のとほりを同行にあひ談合すべき
ことなり

『蓮如上人御一代記聞書』

第九組 西圓寺 近藤 良祐

【富山教区教化テーマ】

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？

二〇二〇年 富山別院 秋季彼岸会法話

「生きる意義」

高岡教区第六組 真行寺 住職

梨谷 真嗣氏

この法話録は、二〇二〇年九月二十一日、富山別院秋季彼岸会において、梨谷真嗣氏よりお話されたものに加筆修正いただいたものです。

(三帰依文唱和)

第一章 「正信偈」とは

馴染み深いかわりにくい

高岡から参りました梨谷と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

今ほど、「正信偈」をお勤めされましたが、別院の彼岸会という仏事のお勤めということもあって、普段皆さんがお勤めされるのとは節が

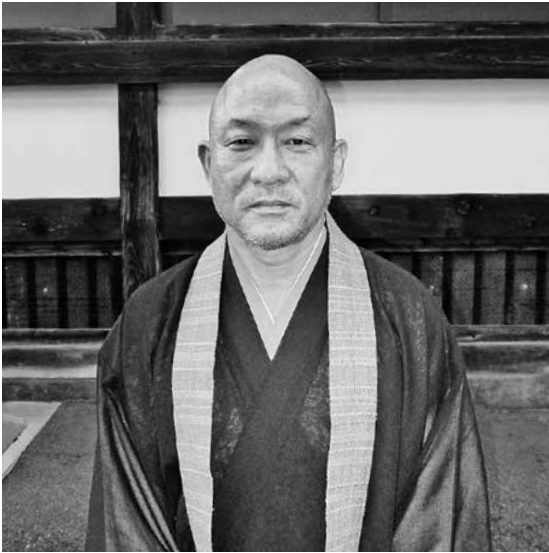
若干違っていました。さて、この「正信偈」ですが、皆さんもお内仏での朝晩の勤行や、お寺での報恩講に勤められたりと非常に私たちには馴染み深いお勤めであります。

この「正信偈」は親鸞聖人が書かれた『教行信証』という書物の中にあります。『教行信証』は「教・行・信・証・真仏土・化身土」と六卷から成り立っています。その六卷のうち「行巻」の中の最後に、この「正信偈」が書かれております。ご存知のとおり「正信偈」の偈という字は詩^{うた}という意味であります。つまり親鸞聖人がお念仏の教を褒めたたたえた詩なのです。詩は

經典の内容を解釈するかというのではなく、純粹にその人の気持ち、仏法に帰依する気持ちをうたったものなのです。キリスト教でもゴスペルというのがありますが、詩は非常に人間の信仰心を表現しやすい方法なのだと思います。仏教の經典の中にもたびたび詩が出てきます。

お経というものはお釈迦様が説かれたお言葉ですが、「正信偈」は親鸞聖人が説かれたお言葉です。さて、この「正信偈」はとても私たちに馴染み深いものですから、いろんなところで御門徒さんから「正信偈には、いったい何が書いてあるのか」と、こういう質問をされます。私は高岡教区の第六組ですが、私たちの組の推進員連絡協議会ではかつて二ヶ月に一回、「正信偈」について講師の方を招き勉強会をしてもらいました。私自身も「正信偈」に関していろんなところで先生の話の聞いたたり本を読んだり「正信偈」には何が書いてあるのかと自分なり考えてきました。でも、なかなかピンときませんでした。

いろんな講義や本などで説かれる内容は、例えば「帰命無量寿如来 南無不可思議光」とあ



高岡教区第六組 真行寺 住職 梨谷 真嗣氏

りまして、それは阿弥陀仏を讃える心境をまず親鸞聖人が告白したと、それから話が始まって、真ん中くらいまでは依経段とって阿弥陀仏とお釈迦様のことが書いてある。その後の半分は、親鸞聖人が尊敬された、親鸞聖人が影響を受けられた七高僧のことが書かれていると、だいたいこういう説明があり、その後七高僧の一人ひとりの説明と、こんなふうには講義が進んでいくのではないのでしょうか。

ただ、そういう話を聞いても私には「正信偈」に書いてあることが、なかなかわからないのです。それはなぜかという、実は「正信偈」と

いうのは親鸞聖人が書かれた膨大な文字数の書物である『教行信証』の全てが凝縮されているからなのです。ですから、これは言い過ぎかもしれませんが「正信偈」の内容がわかったら『教行信証』の内容がわかったと言ってもいいくらいかと思えます。つまり「正信偈」の内容がわからないのは当たり前で、むしろ、内容はわからなくても良いのです。「正信偈」を通して親鸞聖人は私たちに何を伝えたのかを感じ取れば良いのです。

一番後ろから読んでみる

そこで私はある先生のアドバイスを受けて「正信偈」を最初から読むのではなく終わりから読んでみました。そうすることによって「正信偈」で親鸞聖人は何を伝えたかったのか何となくわかってきたように思えました。では、皆さんと一緒に「正信偈」を後ろから見ていきたいと思えます。

赤い勤行本を持っておられる方は三十二ページの四行目を見て下さい。そこに「唯可信斯高

僧説」という言葉があります。これが親鸞聖人が私たちに一番伝えたかったことではないでしょうか。「ただ高僧たちの説を信ずべし」という意味です。親鸞聖人は「私の言ったことを信じなさい」とは言われませんでした。「ただその高僧たちの説を信じなさい」と、こう言われたのです。この高僧というのは位が高い僧という意味ではありません。親鸞聖人に真宗の教えを伝えてくださった方々のことです。インド、中国、日本の七人の高僧です。ただ、その人たちの説を信じなさいと、私のことを信じろとは言わないのです。「正信偈」の一番最後のお言葉ですが、ここがスタートなのです。

では、その高僧たちというのは誰のことなのかということがずっと書いてあります。赤本の三十一ページの一行目に「本師源空明仏教」とあります。源空というのは親鸞聖人の師匠の法然上人のことです。親鸞聖人は法然さんから教えをいただいたのです。法然さんからの伝統です。では法然さんはどうなのか、今度は二十八ページに「源信廣開一代教」と一行目にあります。源信さんからの伝統を法然さんは受けとつ

たのです。そこには源信さんが何をなされたかが書いてあるのですが、今はそのことの意味を考える必要はありません。ただその伝統ということを知ればよいのです。次に源信さんはどういう伝統を受けたかというところ、二十六ページを見てください。二十六ページに「善導獨名佛正意」と書いてあります。「善導がひとり佛の正しいおこころを明らかにされた」と、こうあります。善導さんからは中国の方になります。その善導さんはどういう伝統を受けたかというところ、二十四ページの一行目に「道綽決聖道難證」とあります。道綽さんが浄土の教えをあきらかにしてくださいとおかげで、善導さんは浄土の教えに帰依することができたと。では道綽さんはどうなのか、二十一ページの一行目に「本師曇鸞梁天子」とあります。道綽さんは曇鸞さんか浄土の教えを受け継いだのです。では曇鸞さんはどうだったか、十八ページの一行目です「天親菩薩造論説」とあります。天親さんからはインドの方になります。天親さんから曇鸞さんは浄土の教えの伝統を受け取ったのです。では天親さんはどうなのかというと、十五ページの三

行目に「龍樹大士出於世」とあります。「龍樹大士がこの世に生まれて」と、龍樹さんの浄土の教えを天親さんが受け継ぎました。もちろんこの方々はそれぞれ一人ひとり受け継いだわけではありません。私は全体の流れを言いたかったのでこのように話させていただきました。親鸞聖人は法然さんの教えだけではなく、それ以前の方々の伝統全てを受け止められましたし、法然、源信もそうなのです。さて、今度は龍樹さんさかのぼりますと八ページの一行目に「如来所興出世」とあります。如来とは釈迦如来のことです、お釈迦様がこの世に出現されて、その教えを龍樹は受け取ったということなのです。このようにそれぞれの時代を浄土の教えに生きられた方々の伝統が親鸞聖人の元に届いた、その伝統を襲めたたえたのが「正信偈」というお聖教なのです。

始まりは法蔵菩薩

さて普通、仏教というとお釈迦様が説かれた教えなので、仏教はお釈迦様から始まったとい

う思いで、さかのぼるのはここまでで終わりと思ってしまうのですが、「正信偈」はここでは終わらないのです、その前があります。三ページの三行目に「法蔵菩薩因位時 在世自在王佛所」とあります。法蔵菩薩が因位の時、因位というのは修行の時です、その時に世自在王仏のもとにいて、とあります。つまりお釈迦様は法蔵菩薩つまり阿弥陀仏から浄土の教えを受け取ったということなのです。真宗の教え浄土の教えとは、お釈迦様から始まったのではなく、法蔵菩薩が世自在王仏と出遇ったことが始まりなのです。その出遇いが法蔵菩薩、つまり阿弥陀仏の本願となり、長い長い年月を通してお釈迦様や七高僧、それ以外の多くの念仏者を通して親鸞聖人にまで至り届いた。その歴史、伝統が真宗の教えとなったのです。

ここで普通私たち現代人はお釈迦様までは歴史上の人として頭で理解できるのですが、法蔵菩薩や世自在王仏という存在がどうも理解できないのです。法蔵菩薩は阿弥陀仏のことですが、この阿弥陀仏や世自在王仏というのは仏教でいう方便、比喻ですから歴史上の人ではありません

ん。物語です、法蔵物語です。もともと言葉にもできないような本願が私たちに至り届くようにと方便として法蔵物語となつて私たちに届けられたのです。

真宗の教えは二尊教といひまして阿弥陀仏と釈迦牟尼仏の尊い方によつて成り立つ教えと言われています。この阿弥陀仏とお釈迦様の違いとは何か、阿弥陀仏は「願」です。お釈迦様は「教」です。この違いがあります。お釈迦様は八万四千の教えを説かれたと言われています。

私たち人間の為に仏の教えを言葉として教えてくださいました。阿弥陀仏の願というのは教えではなく、本来私たちが持っている願のことです。本来持っているもの、誰かから教えられたものではなく、生まれながらに私たちに備わっていた願いなのです。その願を言葉として初めて言い表してくださつたのがお釈迦様なのです。願が言葉として教えになったということです。

以前、私が聞いた法話の中にこんなお話がありました。今から四万年前から五万年前のネアンデルタール人の遺跡が近年発掘されました。シヤニダール遺跡というそうです。その遺跡に

はお墓のようなものがありました。五万年前のお墓であろう遺跡が発掘されたのです。そこに花粉の化石が出てきました。それと赤い粉の化石と石で囲まれた火を焚いた後のようなものが発掘されました。たぶん墓らしきものですから死者に対して花をたむけたということでしょう。赤い粉は、人間は血が無くなつて死にますから、その血が無くなつたことに対して赤い粉を血の代わりにまいたであろうと考えられます。現在私たちは仏式で葬儀を行います、人間は仏教ができてから葬式を行うようになったのではなく、はるか遠い昔、五万年前に言葉があつたかどうかはわかりませんが、言葉があつたか人間の死をいたみ、死を苦しみ、生きることに苦み、死者に対して別れの儀式を行なつていたのではないのでしょうか。こういう言い方をしたら語弊があるかもしれませんが、お釈迦様の教えの歴史はたかだか二五〇〇年です。しかし、二五〇〇年以上はるか遠い昔、お釈迦様やキリストの教えを聞くこともなく、宗教というものを知らない五万年前の人間が人の死をい

たみ、人の死を苦しみ、人生の苦しみを感ずてきた歴史があるのです。教えというものの以前に人間の歴史には人間の願があつたのです。それこそが阿弥陀仏の本願なのです。

さて、法蔵菩薩から始まつた本願がお釈迦様によつて教となつた浄土の教えはこのように七高僧の歴史を通して親鸞聖人のもとまで届いたのですが、その後も伝統は止まることなく『御



文」を書かれた蓮如上人であるとか、多くの念仏者を通して生き続けてきました。それは有名な方々ばかりではなく、身近でいえば私たちのおばあちゃんおじいちゃん、お母さんお父さん、様々な方の歴史があります。子供の頃、家のお内仏に手を合わせていたおばあちゃんやおじいちゃんの姿、その姿が真宗の伝統なのです。その姿があったからこそ今、私たちはこの場に身をおくことができるのです。

真宗の行

さて、今までお話させていただいた「正信偈」は先程、親鸞聖人が書かれた『教行信証』の「行巻」にあると言いましたが、なぜ「行巻」にあるかということ。『正信偈』には親鸞聖人にまで届いた浄土の教え、念仏の教えの歴史があらわされていると言いましたが、その歴史のことを親鸞聖人は「大行」と言われました。親鸞聖人が言う行というのはこの大行のことです。このお念仏の歴史が真宗の大行なのです。この大行は法蔵菩薩が世自在王仏に出遇ったところか

ら始まり七高僧を通して親鸞聖人にまで届き、その後も多くの念仏者の歴史を通して、今私のところにまで至り届いたのでしよう。そしてこの大行を今度は私たちのもとから次の世代へと届けなくてはなりません。

私たちは「行」と聞くと仏教における厳しい修行を思い浮かべてしまいます。千日回峰行であったり断食であったり、長い時間をかけて経典を読誦したりとか、そのようなものを思い浮かべます。

またよく言われるのが真宗には厳しい行がないということ。真宗門徒の行とはいったい何なのでしょう。法然上人は称名念仏が我々の行であると教えてくださいました。口に南無阿弥陀仏と称えることが行であると、困難な修行は我々にできないから口に南無阿弥陀仏と称えることで往生できるのだと教えてくださいました。しかし親鸞聖人が言われた念仏とは我々が口に出す称名念仏ではないのでしょうか。『教行信証』の「行巻」には大行として諸仏の称名念仏が説かれています。つまり諸仏とは私たちに浄土の教えを教えてくださいました方々、「正信偈」

には具体的に七高僧があげられています。その方々の大行としての称名念仏に対して私たちの行とはその称名念仏を聞くことなのです。「聞」です。私たちの行は称名ではなく聞名なのです。私たちに浄土の教えを教えてくださいました方々の称名に対し私たちは聞名する、そのことが先ほどから「正信偈」の内容でお話させていただいた浄土の教えの伝統、浄土の教えの歴史に私たちが参加するということになるのです。

聞くとは何か、具体的に言えばこういう場、本日の富山別院の彼岸会、この場です、こういう場に身を置くことなのです。何度も何度もこのような場に身を置き続けることが聞ということになるのです。では私たちには称名は必要なのか、私たちの称名念仏は大行としての諸仏の教えを聞いた時、受け取った時の応えとし報恩感謝としての念仏が私たちの称名念仏なのです。

聞名、名を聞くとは何か、名とは声のことで、私たちが声を聞いてその声に応えるのです。子供がお母さんと文字で書いてもその子のお母さんにはなりません。その子が「お母さん」

とその人に対して声を発した時に、子供とお母さんの関係が成り立つのです。名が声になったことよって初めてその子にとってのお母さんになれるのです。

その名というのは言葉です。阿弥陀仏のはたらきとして光明ということが言われます。私たちの闇を破る光です。私たちの無明を破るはたらきが阿弥陀仏の光明です。具体的に例をあげますと、真つ暗な部屋で何も見えない時に少しカーテンから月の光が入っただけで闇が破れて見えてくる時があるでしょう。それが阿弥陀仏のはたらきとしての光明です。その光明は阿弥陀仏の浄土で光明として放たれますが、私たちのいる穢土ではその光明が声となって言葉となって私たちに届くのです。その言葉が無明として生きている私たちに響いてきた時に闇が破られていくのでしょうか。

「正信偈」の中に説かれていることは法蔵菩薩から始まった大行が多くの念仏者を通して親鸞聖人にまで届いたということ、そしてそれは親鸞聖人からまた多くの念仏者を通して今私たちに届いている、その歴史、その伝統こそが真宗



の教えそのものであり、そのことを大行として親鸞聖人は私たちに教えてくださったのであります。そして私たちはその大行として届けられた真宗の教えを聞くということ、それが私たちの行であり、その大行としての歴史に参加していくということになるのです。

第二章 「生きる意義」

高齢者の介護の課題

今回の法話のご依頼を受けさせていただいた時に、講題をとということで「生きる意義・生きる喜び」という題を出させていただきました。

特にこの「生きる意義」ということが前から私の中での課題となっていました。そのきっかけは高岡教務所で南砺市の方からお話をいただいたことでありました。どういうお話かというと「町ぐるみで支え合い、安心して暮らせる南砺市。地域共同社会を目指して」という取り組みの話です。具体的に言うと、介護が必要な高齢者の方々と共に住みよい町、暮らしやすい地域を作っていこうという取り組みをされているということです。

その中で自殺に関するお話がありました。南砺市で六十歳以上の男女別の自殺死亡率の調査が行われましたが、その結果で特に注目されたのが、七十歳代の女性の自殺死亡率が全国平均

一七・四人に対して南砺市は五五・四人と、全国平均の三倍の自殺死亡率の数字が出たそうです。ああいう田舎で平均より三倍もあったというところが非常にショックでした。そこでその自殺された高齢者の女性の生活状況を調べますと、独居がゼロで全てが家族と同居の方々なのです。そこにはどんな理由があったのでしょうか。中には家族に迷惑をかけたくないという思いから自ら命を絶たれた方もおられたと思います。亡くなられた方に理由を聞くわけにはいかないのです、はっきりとは言えませんが。しかしそこにはやはり、生きる意義、生きる意味を失ったということが理由になっているのだと思います。自ら生きる意味を失っていくこともあるでしょうが、そこには周りがその人の生きる意義を奪っていくということもあるのです。

この話の最後に話をされた方は、私たちに「僧侶であるあなた方にも真剣にこの問題に関わって欲しい、あなた方僧侶の力がぜひ必要だ」ということを言われました。私たちは介護に関しては素人ですので具体的な現実的な問題を解決することは難しいかもしれません。現実的な問

題を解決できるのは、病院や施設や介護士の方やお医者さんなのかもしれません。人生にはこのような介護の問題以外にも様々な現実的な問題があります、その現実的な問題を現実的に解決しても、また新たな現実的な問題が出てきます。大事なことは現実的な問題の奥にある原理的な問題、人間の根本的問題に触れていかなければならないのだと思います。僧侶である私たちに関わって欲しいということは、私たち真宗の教えを聞く者にその人間の根本的な問題として関わって欲しいということなのだと思います。

私にとってこのお話が心に響いてきたのには理由があります。それは自分自身の父親の介護の体験です、もう亡くなりましたが父親の在宅介護を約五年程やりました。その時は介護する側と介護される側の思いの違いから、たびたびぶつかったことがありました。この話を聞いて思い出した父親の言葉があります。「わしは留守番ひとつもできん、なんの役にもたたん人間やな」という言葉です。この言葉が私のこの問題に対しての原点だったと思いました。

障害者に生きる意味はあるのか

さて、この「生きる意義」ということについて考えさせられたもう一つのお話があります。二年前の高岡大谷会館の報恩講でお聞きしたお話です。その話を少し紹介させていただきます。皆さんもご存知の事件だと思いますが、二〇一六年七月二十六日に神奈川県相模原市津久井やまゆり園で起きた相模原障害者施設殺傷事件に関しての話でした。今から四年前になりますが、津久井やまゆり園で、元職員がそこにいる障害者の方々を次々と殺したり傷つけたりした事件です。

その事件にはもう一つ注目すべきことがありました。犯人は犯行を前に衆議院議長に手紙を送っていたのでした。その手紙の内容は、そういう施設にいる人間には何の価値もない、生きる価値がない。一人では生きられないし、周りの人間に迷惑をかけないと生きていけない。日本には安楽死という制度がないので、私が代わりに安楽死させてやるのだと、そしてこのこと

は、日本人みんなが思っていることだから、私
がみんなの代わりに安楽死させてやるのだと、
こういう内容の手紙を衆議院議長に送ったわけ
です。その話の後、講師の方も言っておられま
したが、私も同じ思いでした、つまりその手紙
の内容を聞いた時、私たちは犯人に対して反論
するのです。人間には、どんな人間にも生きる
価値があるのだと、たとえば、子供が自分では
何もできないような障害者でも、その子が生き
ているだけで、家族や親は生きる希望が与えら
れるのではないか。寝たきりとなった老人にも
何か生きる価値があるはずだと。

そしてその時の話にはまだ続きがあります。
東大のゼミの様子をNHKのeテレ（以前の教
育テレビ）で放送していた話です。私は見てい
ませんのでその時に聞いた話をしますが、ゼミ
というのは講義ではなく、何人かのグループで
テーマを出して話し合うという形式の授業で
す。そのゼミのテーマは障害者に生きる意味は
あるのかという内容だったそうです。私は実際
に見ていないので想像ですが、生きる意味が無
いということをお願いしたいのではなく、そういう

人たちにも生きる意味があるということを伝え
たかった、そういう趣旨の内容だと思えます。

それでどういうことをしたかという、体の
筋肉が衰えていき、手や足が動かなくなり、口
やあごの筋肉も衰えてしゃべれなくなった方に
対して、障害者に生きる意味、生きる価値があ
るのかという質問をしたそうです。その方はしゃ
べることができないのですが、五十音の表があつ
て、目の網膜の動きを機械が読みとることによつ
て文章を作り、意思を伝えるというのです。事
前にその質問は提出してあり、その方は文章と
して答えを持ってこられていました。何と答え
られたかという、「私たち障害者に生きる意味
や生きる価値はあるのか」という質問をする時点
で、あなたたちはやまゆり園の犯人といっしょ
です」そう答えられました。

生きる価値として人を見る

私は介護が必要な高齢者の方や、障害をもつ
た方々、一人で生活することができない方、そ
ういう方々に生きる意味があるのかとたずねら

れた時、絶対に何か生きる意味はあるはずだと
いう思いから、自分の中で自分の考えでその人
の生きる意味を自分勝手に作り上げていたので
す。そこには生きる意味ということを心の奥底
で、生きる「価値」に変えてしまっている。価
値とは何か。それは有用性ということ。何
か他の人の役に立つこと、例えば家族であれば、
父親は家族の為に家事は何もしないかもしれま
せんが、しかしお金を稼いできてくれる、家族
にとつて有用性があることですね。おじいちゃ
んやおばあちゃんがいて、お金は稼げないけれ
ども年金で子供にちょっとでもお小遣いをくれ
たり、父母が共働きで夕方に家にいない、おじ
いちゃんがまだ免許を持っているので雨の降つ
た日に子供を車で迎えに行ってくれる。これも
有用性があります。だから、私たちは人間の生
きる意味というものを、生きる価値つまり人間
の有用性に自然と置き換えてしまう。だから自
分一人で生きていけない老人は有用性を無くし
てしまったから、そこに生きる意味を見失って
いくのでしょうか。また周りの者が生きる意味を
生きる価値に変えてしまい、その人から生きる

意味を奪ってしまうのです。

だからといって私には生きる意味ということ
はわかりません。二〇二三年に計画されている
「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗
八百年慶讃法要」には「南無阿弥陀仏 人と生
まれたことの意味をたずねていこう」というテー
マが掲げられました。生きる意味を生きる価値、
人間の有用性にすり替えてしまうような、そんな
私たちの自分勝手な思い、はからいで生きる
意味ということをたずねるのではなく、南無阿
弥陀仏に生まれたことの意味、生きる意味をた
ずねていこうということなのだと思います。

話は変わりますが、私たちの組では毎年七月
一日から三日まで「夏期仏教講座」という講座
があり、七月末には「暁天講座」が三日間あり
ます。私は組の役員をしていますので、今年
は新型コロナウイルス感染症のこともあり、それ
らを中止にしようと思っていました。組の教化
委員会と僧侶と門徒会会長、推進員会長が集
まって、一年間の教化事業をどうするかとい
う会議をしましたが、そこで私は何かあったら大
変だから今年は中止にしようと思案しました。

すると、門徒会長が「コロナウイルスを理由に
行事も何もかもやめにしている、それではいか
ん」ということを言われたのです。そこで一気
に会議の雰囲気は何とかしてやろうというふう
に変わったのです。それで今日みたいに間隔を
あけて、マスクをつけて、消毒液を置いて時間
も短縮して行うことになりました。「夏期仏教講
座」は三日間で三人の方がお話をされますが、
その初日に城端別院の輪番さんが来られてお話
をしていただきました。その時に仏教詩人の榎
本栄一さんの「朝」という詩を紹介していただ
きました。

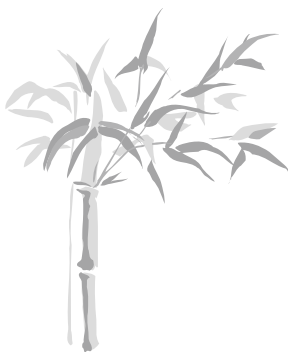
自分がどれだけ世に役立っているかより、
自分が無限に世に支えられていることが朝
の微風そよかぜの中でわかってくる

という詩です。人間の有用性を考え、人間の価
値を自分勝手に作り上げ、作り上げた自分の思
いに苦しんでいる私たちに、そんなことを考え
るよりも、私が生きているのはたたくさんの方の
支えによって生きているのだと、そういうこと

が朝の微風の中でわかったということですね。
この詩によって南砺市の介護のことや、東大
のゼミの中で障害者の方が言われた言葉につい
て少しですが自分なりに領けるところがあるよ
うに思えました。

さて、現在感染症拡大ということで、あらゆ
ることがストップしていますが、今日は彼岸会
という場を作っていたいただきまして、ありがたい
ことだと思えます。これから報恩講の時期にお
寺は入っていきます。うちは十一月ですが、ど
ういう形にするか、今年はお斎がなくなったり
することになるかと思えます。しかし、変わっ
ていく中で、皆さんが様々な対策をしてこの場
に身を運んで聴聞されるといことは非常に大
事なことであり尊いことだと思っています。

このたびは、お招きいただきありがとうございます。
いました。



門首継承式団体参拝に参加して

連日の新型コロナウイルス感染症報道で、いろいろな行事が中止となる中、門首継承式団体参拝のお話を聞き参拝するか迷っていたとき、無二の親友より一緒に参拝しようとする背中を押ししてもらい、出発当日まで体調に気をつけ参加することが出来ました。バスに乗車する前検温を受け、定員も半数と制限され隣に座る人もなく車中は静かなムードでしたが、添乗員の方の気働きや教務所の引率者の方々の法話等で楽しく過ごしました。初日は長浜別院大通寺を参拝し、翌日本山御影堂での継承式に参列し、大谷暢顯前門首が二十四年間務めをはたされ、退任のご挨拶をなされる姿に六年前の富山別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に、大谷暢顯前門首による帰敬式で受式し、法名をいただくことが出来た時の感動のおもいが一度に浮かび心が熱くなりました。大谷暢裕二十六代門首が外国語を交えて表白をなさる姿に、世界中の人々に真宗のみ教えを「南無阿弥陀仏」を届ける強いおもいを感じ、世界に同朋の声が伝わる新しい時代と未来におもいを馳せました。またとない勝縁に全国から参拝された多くの同朋と『正信偈』を唱和し、声の限り『恩徳讃』を

斉唱した声が、感染症対策で前後左右十分な間隔で椅子席が配備されていた御影堂に大きくずっしりと響きわたり、もしこれがコロナのない平常時であればどんな光景であったのかと想像し、また一段と感慨深いものがありました。莊嚴直しがなされ二十一日から報恩講が勤まる本山を後にして、今日から心新たに如来、聖人の尊いご縁に導かれ聞法生活を続けてまいりたいと願うばかりです。無事に楽しい意義ある二日間にご尽力いただいた皆様に心より感謝いたします。

第十組 福恩寺門徒 米田 紀子

* * *

去る十一月十九日から二十日にかけて門首継承式団体参拝に参加させていただきました。厳しいコロナ禍の中、いろいろな方の配慮や手配、準備等のおかげで無事帰宅することができました。このまたとない好機に恵まれたご縁、御同朋の方々に出会えたご縁がともうれしく喜んでいます。いただいたご縁を大事に一日一日を大切にしていきたいと思っております。年を重ねるにつれ不自由が増えていきます。我身に起こる状況に不平不満を言い腹も立てます。こんな愚かで浅はかな身を不憫におもい、気にかけてくださる阿弥陀如来、聖人さまがいてくださり、心強く穏やかでいられます。生涯、仏法聞法とお念仏のある生活を大切に暮らしていきたいと思えます。

第十組 福恩寺門徒 黒田 孝子





現在の本堂が建った頃の様子（平成元年）



境内内にある親鸞聖人像



現在の境内の様子

お寺紹介

渕上山 本傳寺

ほんでんじ

（黒部市沓掛）

教区内のお寺とその取り組みについて紹介します。
今回は第十二組本傳寺の若院にお話を伺いました。

本傳寺の成り立ちと経緯について

1207年、親鸞聖人（1173～1262）が越後に流罪の折、越中国新川郡荻生村金津の民家に立ち寄られ、教えを受けた先祖が、一乗坊という号を賜り一字創立されたのが始まりと伝わっています。ですから、この一乗坊玄海という方が開基です。なお寺号の「本傳寺」は、本願寺第十代證如上人（1516～1554）より賜りました。

その後、慶長年中（1596～1614）に惹起した本願寺東西分立の時（※1）類焼に罹り、ご本尊のみ免れましたが、その他の記録等が全て焼失してしまい、開基の一乗坊玄海からの史料が無く、不詳なのです。

現在の地に移ったのは、天保年間（1681～1683）からであると伝わっています。

※1 本願寺東西分立時の伝承

「本願寺東西分立時、この地方の教如上人（1558～1614）を支持する中心人物は青木村真藏（入善町浄慶寺）、生地村正秀（専念寺）、荻生村玄正（本傳寺）ら6人であった。

そのうち真藏と正秀は前田利家の配下に捕らえられて、神通川原で打ち首になり、玄正ら4人も捕らえられたが、地頭の口添えて命だけは助かった。しかし、教如派に対する追求は厳しく、これらの人を国外に追放し、寺を焼き払い、もし本人が国内に残っていれば、見つけ次第成敗するということを高札で告げていた」と伝わっています。

こんなことを やっています

1 寺報「まんまだより」の発行

お寺での仏事のご案内やご報告、親鸞聖人がお作りになった和讃を味わうといった内容になっていきます。A4サイズで両面印刷し、半分に折ってお渡ししています。



(『まんまだより』38号)

2 お寺でヨガ

若坊守の里奈さんが講師となって開催しています。今は親子ヨガ、産後の骨盤スリムヨガが中心ですが、今後は開催時間を夜にしたり、イソガをしたりなど、いろいろと計画中。



3 音楽イベント

これまでにバンド演奏でのライブ、コーラス中心の音楽祭を開催してきました。お寺の近隣の皆さんなどもお越し下さいます。新型コロナウイルスの感染状況を鑑みながら次回開催をと思っています。



4 伝道掲示

お寺の参道と丸山豆腐店さんに毎月法語を掲示しています。また、暁天講座やご法事でお寺にお参り下さった方に、お菓子といっしょに法語カードを作ってお渡ししています。お子さんには風船などを添えています。



5 ホームページ

四年前に御門徒さんからの要望をきっかけに作りました。ブログを掲載したり、最近ではYouTubeを活用しながら運営しています。月に一回は更新するようになっています。

HPのQRコード



<https://hondenji0704.jimdofree.com/>

◎これからについて……「自分が聞法する」という姿勢を大切にしながら、聞法会やお勤め練習会、長期休みを利用しての子ども会などができたらいいと思っています。

新コーナー

仏事について日常の疑問

～ 編集委員座談より～

日々の法務の折に、ご門徒の方からいろいろな質問を受けることがあります。

そのような質問について、『如大地』編集委員で座談をしました。

今回は、二つの質問についての座談を掲載します。



お仏^{ぶく}はなぜご飯なのか。
パンでもいいのかが。

司会 皆さん、門徒さんの家にお参りに行かれた際に、お仏供はお備えしてありますか。

委員 A お備えしてある家が多いですが、ない家もあります。お寺からお参りに来てもらう日だけお仏供をお備えする家もあります。パンやお菓子をお供えしてある家もありますね。

委員 B そもそもなぜお仏供をお備えするのでしょうか。

司会 かつてお米が貴重で常に食べることができない時代があり、貴重だったからこそまず仏さまに、という思いがあったのでしょうか。

委員 A 亡くなった方々に食べてほしいからお仏供をお備えするという思いを持っている方も多いのではないかと思います。だから、お菓子やお酒をお供えするのでしょうか。

委員C 話が少し横にそれますが、門徒さんから、一部の地域では、葬儀の後に赤飯を配るところがある。毎日白米でなくても、五十回忌などの節目の時には赤飯をお仏供にしてもよいのではないかと言われたことがあります。

委員B 私はいのちの糧、いのちの基となるご飯をお備えすることによって、食の恵みに日々感謝するため、と教わりました。

委員D なぜご飯でお仏供をお備えするのかということについて、諸説ありどれが本当なのかわからなくなっています。白米をそうそう食べられなかった頃は、白米に対する人々の思いも今とは全く違ったのでしょうか。

司会 お仏供を含めた荘厳（お内仏のおかざり）は極楽浄土を表しています。そうすると、お仏供と他のお供え物とは区別するべきでしょう。お仏供以外のお供え物は、お内仏の手前に置くのがよいかと思えます。

委員B お仏供を「そなえる」というときは、「供える」ではなく「備える」と書きます。「備」を使うということは、お仏供が浄土を表す荘嚴の一部だということなのでしょう。

委員B 昔インドで人をもてなすために、お花・お香・浄水・燈明・食事を用意したそうです。それが仏前の荘嚴の起源となったようです。でも他宗では、仏さまに向けての荘嚴という考え方であるようです。

委員A 通仏教（仏教全般）と浄土真宗の荘嚴に対する考え方の違いはありますね。こちらから仏さまの方へ向かうのか、仏さまからこちらに向かってくださるのか。

委員E いつも朝はご飯を炊かずにパンを食べているからパンをお供えするというのは、自分中心の考え方ではないでしょうか。仏さまを中心に考えるならば、きちんとご飯を炊いてお仏供をお備えできるのではないのでしょうか。

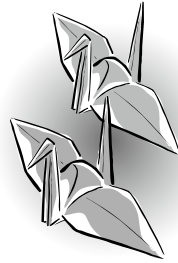
司会 私たちの主食がご飯でなかったら、お仏供は別の形になっていたかもしれません。時代とともに主食も変わっていくのかもしれないし、それは仕方ないことでしょう。しかし、お仏供の原点、本来の意味をきちんとお伝えしていくことは大切なことではないでしょうか。

委員B パンが主食になっている人には、パンを使った荘嚴があってもいいのではないかと思えます。

委員D 本来の形や意味が分からなくて、パンをお供えするのが当たり前になっていくことが問題であって、仏事の崩壊につながりかねないと思います。本来の意味が分かっていると、そのうえでパンをお供えしているのであれば問題はないだろうと思います。

委員B 伝統といっても形だけを伝えればよいというものではなく、その意味もきちんと伝えていくことが大事なのでしょう。

お仏供を含めた荘厳は、極楽浄土を表しています。お米が貴重だったころからまずは仏さまにと、先達はご飯を盛ったお仏供をお備えしてきた長い伝統があります。お仏供の代わりにパンでもよいとは簡単にはいえませんが、お仏供を含めた荘厳の伝統とその意味を知ることが大切です。そして、日々の生活は仏さま中心なのか自分中心なのか、考えていただきたいと思えます。



年忌法要は何回忌まで勤めればよいのか。
法事を勤めるのは義務なのか。

司会 皆さん、法事を勤める意義について、ご門徒の方にお伝えされていますか。

委員D そういってお話は常にしています。この

ような質問が出るのは、そのお宅が代替わりしたときが多いようです。ただその裏には、法事を勤めるのは面倒だからなるべくしたくない、という気持ちがあるように思います。費用もかかりそうです。

委員C 門徒さんから、月忌参りに留守にしても勤めてもらえないか。命日でなくても勤めてもらえれば供養になるのではないか。他地域では二十三回忌・二十五回忌・二十七回忌の法事を勤めるとのことだがなぜかと聞かれたことがあります。そもそも法事を勤める意識が低下しているのではないかと危機感を持ちます。

委員A 法事を続けて勤めると、「法事疲れ」になっている方もいます。「これだけ勤めたからもういいだろう」という気持ちになるのでしょうか。ただ、自分では決められないからお寺さんの意見が欲しい、ということなのでしょう。

委員D 法事とありますが、本来は法要・法会です。「法（仏の教え）に会う」ということです。

ね。人間は忘れてしまう生き物ですから、これだけ勤めたからもういいではなく、繰り返し法事を勤めていくことが大事だと思います。

司会 今年はコロナ禍で中止になってしまった法事も多かったと思います。これをきっかけにして、法事を勤めなくなるかもしれない懸念されます。

委員B なぜ法事を勤めたくないご門徒の方々は思うのでしょうか。門徒の方々がもう勤めたくないと思うような法事を、我々僧侶が行っているからではないでしょうか。「法事を勤めてよかった」と思ってもらえるような法事を勤めていないからではないでしょうか。

委員D 僧侶側の力不足もあるでしょうね。

委員B 自分がもし法事に参列している側だったら、意味のわからないお経を聞いていると、早く終わらないかなと思ってしまうですね。

委員D 「法会」ということを考えると、お経なしで法話だけでもいいんじゃないかと思えます。供養のためのお経ではありませんからね。でも実際はありえないでしょう。だいたい法話よりお経の方が長いですね。お経が短いと、門徒さんが納得しないかもしれません。

司会 長生きの時代になっていますから、これからは、親の五十回忌を勤めることが難しくなっていくでしょう。

委員D 今の若い方に見てみたら、顔も知らない先祖の法事をなぜ勤めるのか、という思いもあるでしょうね。

委員A でも、亡き方々との機縁をいただいて法事を勤めるのですからね。

委員D そのことを日頃強くお伝えしているのですが法事を勤めると、「気持ちが悪くなります」「亡き父も喜んでいきます」と言われたりします。

司会 それは、自分が安心したいから法事を勤めた、ということなのでしょう。亡き方に向けての法事ではありませんからね。

委員D 真宗の教え、法事に対する考え方がわからなくなってしまうのでしょ。

委員A どうしても「亡き方の供養のための法事」という認識が強いと思いますね。

委員D 供養が悪いというわけではなく、供養をとおして真宗の教えに出遇ってほしい。でも、供養のところで止まってしまっている。

委員A 供養の仏教に留まっているから、何回忌まで法事を勤めなくてはいけないのか、義務なのかと思ってしまうのでしょ。

委員B 法事を始める前に、法事の意義をお話しする。あるいはお経の前に法話をする、という方法も考えられます。

司会 繰り返しくりかえし法事の意義を門徒さんにお伝えしていくことが大事ですね。

まずは法事を勤める意義を確認していただきたいと思えます。自分なりに意義を持つことができれば、法事に対する姿勢も前向きになるかもしれません。亡き方は、阿弥陀仏に出遇う場を与えてくださる諸仏です。その場である法事で真宗の教えに出遇い、お念仏申す人になることこそ、供養といえるのではないでしょか。

*次号は「分骨について」を掲載します。



教区だより

(敬称略)

住職任命

(二〇二〇年七月一日～十二月三十一日)

二〇二〇年八月二十八日

第十一組 立尅寺 土肥 真人

二〇二〇年九月二十八日

第十二組 勝福寺 大中臣 冬樹

第十二組 託法寺 華藏閣 行文

教化日誌

(二〇二〇年七月一日～十二月三十一日)

7月

6日 教区制当審議委員会、教区門徒戸数調査委員会

14日 『如大地』編集会議

16日 教区会参事会・教区門徒会常任委員会

20日 あいあう会

21日 通常教区会・通常教区門徒会合同会

8月

1日 戦死・戦災死者追弔法要兼申経法要(八一法要)

3日 正副組門徒会長協議会、正副組長・組門徒会長会合同会

20日 第十三組組会

21日 青少年教化小委員会

24日 あいあう会

26日 第十一組組会

27日 第十三組組門徒会、『如大地』編集会議

31日 第十一組組門徒会

9月

1日 第十二組組会

2日 組織拡充小委員会

3日 第九組組門徒会

8日 第十二組組門徒会

15日 ご命日のつどい【大伴慎介氏】、あいあう会、解放運動推進協議会

16日 共学研修会【佐野明弘氏】

21日 富山別院彼岸会(～23日)

29日 第一回新教区準備委員会

30日 式支配所係役会／助音方習礼／報恩講習礼

10月

1日 境内清掃

2日 仏具磨き

4日 報恩講立華

5日 富山別院報恩講事前準備

6日 富山別院報恩講(～8日)

15日 ご命日のつどい【河村 浩氏】

16日 あいあう会

20日 『如大地』編集会議

30日 解放運動推進協議会

11月

15日 ご命日のつどい【近藤良祐氏】

16日 新教区準備委員会「財務小委員会」

17日 あいあう会

19日 門首継承式団体参拝(～20日)

21日 真宗本廟報恩講(～28日)

25日 解放運動推進協議会、『如大地』編集会議

27日 宗祖親鸞聖人御正忌法要「満さん」(～28日)

30日 『如大地』編集会議

12月

3日 組織拡充小委員会

5日 子ども報恩講

8日 社会教化小委員会

15日 ご命日のつどい【神保孝順氏】、新教区準備委員会「組織小委員会」

16日 部落問題講演会【谷元昭信氏】

18日 新教区準備委員会「教学小委員会」

21日 新教区準備委員会「財務小委員会」、あいあう会

22日 解放運動推進協議会、『如大地』編集会議

25日 院内報恩講

31日 歳末勤行

教務所 人事異動

【転任】 二〇二〇年六月三十日付

幽溪 浩

能登教務所長に任命する

【着任】 二〇二〇年六月三十日付

長澤 秀豊

高岡教務所長

富山教務所長の兼務を命ずる

富山別院輪番の兼務を命ずる

二〇二〇年七月一日付

富山教区高岡教区 教区改編統括教務所長
を命ずる

離任のご挨拶

幽溪 浩

このたび、六月三十日付にて能登教務所長に発令されました。二〇一六年六月二十九日に富山教務所長兼富山別院輪番を命ぜられ、四年間にわたる教区内の皆様のお力添えをいただき、その任を つとめさせていただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

私にとりまして、富山は二度目の勤務となったことでした。在職中、教区におきましては、一年余りの準備期間を経て昨年九月十三日～十四日に開催された第十一回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会在最も記憶に残るものとなりました。また、別院におきましては、長年の懸案でありました駐車場のゲート化になったことであります。しかし、何よりも本年三月に高岡教区との教区改編の合意が両教区でなされたことでありましたが、本当に主体的に我がこととして受けとめていただいで、歩みを進めて来られたということに、心から敬意を表します。今後は新教区準備委員会が発足され、新しい富山教区の誕生に向けて、更に皆さん方が、より良い教区づくりを目指して歩みを進めていかれることを願っております。新任地におきましては、御地でお育ていただきましたことを糧として、一層精進いたす所存でありますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。離任のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

着任のご挨拶

長澤 秀豊

富山教区の皆様方におかれましては、教区諸事業に対しましてご理解ご協力を賜り誠にありがとうございます。当教区におきましては、教区・別

院教化テーマ「なむあみだぶつ」を訪ねませんか? のもと教化事業への取り組みを行っておりますが、新型コロナウイルスの感染拡大が長期化する中、様々な対策を講じなければならない状況にあります。このことは、各御寺院様におかれましても同様に法要執行・行事開催等細心の対応を心掛けておられると拝察いたします。教区では、先般（十月一日）この状況の中で工夫されている教化活動についてのご意見をお伺いさせていただきました。その内容として、寺報発行・掲示伝道・文書配布等による教化活動、法要・会合における会場設営に配慮などのご意見をいただいております。（富山教務所だより十一月より）

なお、宗務所においても調査がおこなわれており、ご門徒が寺院に集まる教化事業及び通夜・葬儀についてのコロナ禍影響はいずれも九十%以上において変化があったとされております。今後においては、更なる留意をしながらも聞法の場を確保していかなければと思慮いたします。

そのような状況の中ではありますが、宗門・教区では、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要に向けてお待ち受け事業の推進、宗務改革としての教区改編を重く受け止め、あるべき将来の宗門を願ひ皆様方とともに歩ませさせていただきます。

最後に小職、六月三十日付にて当教区に着任いたしました半年を経ており、皆様方のご尽力ご指導に衷心より御礼申し上げますとともに今後ともお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

敬 弔

ご生前のご功労を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。

《前任職・住職》

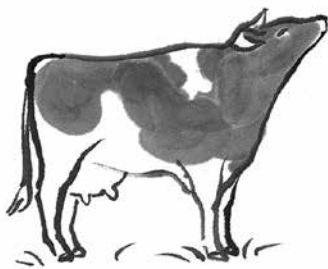
- 第十三組 明誓寺 住職 桑 守 研 映
二〇二〇年八月十一日 寂
- 第十三組 正覺寺 前任職 小 塚 芳 純
二〇二〇年九月十三日 寂
- 第十組 了照寺 住職 築 山 志津夫
二〇二〇年九月二十日 寂
- 第十組 正覺寺^{大鳥} 住職 犬 島 孝 昭
二〇二〇年九月二十九日 寂
- 第十一組 佛念寺 住職 神 涼 昭 夫
二〇二〇年十月十五日 寂
- 第九組 禮行寺 住職 廣 瀬 晃 龍
二〇二〇年十月十七日 寂
- 第十一組 西光寺^{甲申} 住職 神 田 英 雄
二〇二〇年十月二十日 寂

《前坊守・坊守》

- 第十二組 佛現寺 坊守 吉 川 節 子
二〇二〇年七月十七日 寂
- 第十三組 專徳寺 前坊守 森 島 敦 子
二〇二〇年八月六日 寂
- 第九組 尊光寺 前坊守 頼 成 幸 子
二〇二〇年十一月三日 寂
- 第十三組 善念寺 前坊守 下 坂 則 子
二〇二〇年十一月二十六日 寂

◎訂正とお詫び

『如大地』第一四七号に左記のとおり記載漏れがありました。
謹んでお詫びいたし訂正させていただきます。
（14頁 教区坊守会 庶務 第十二組 勝樂寺 藤田 恵子）



編集後記

二〇二〇年を表す漢字は「密」ということでしたが、私は「鬼」という漢字がしっくりきました。その代表格は「鬼滅の刃」という漫画を原作としたアニメで、映画化され、今や日本だけでなく世界中に人気が広がっています。神楽や神を数える単位の柱という日本古来の神道の要素も入った作品でもありません。しかし私はこの社会現象にまでなっている作品のことよりも、むしろ私たち人間の内面にある鬼が浮き彫りになったことが重要だと思えます。それはハラスメントや差別など、誹謗中傷する鬼です。他人を傷つけ、鬼と化している自分に気づいていないのです。ちなみに「キメハラ」という言葉も出てきました。傷つけられた人は苦悩し、自らの命を絶ってしまう人もいます。コロナ禍では、身勝手な行動から始まり、自己愛的^ご都合主義となり、やがて誰も信じられなくなると他人を排除しようとするものが現れました。そこには人に対する思いやりや、優しさのかけらもなくなっています。人でなくなり、鬼となってしまうというわけです。この鬼のことを仏教では修羅といい、私たちの誰もが持っている心の在りかたです。本誌の法話録のなかで生きる意義を周りの人間が奪っていくのではないかと問題提起をされています。どうか苦しくても他人の生きる意義を奪う修羅とならないでいただきたいと願います。

第九組 永源寺 鳥倉 慶晃

『如大地』第148号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。